

令和7年産

大崎稲作情報 第6号

令和7年7月22日発行

宮城県米づくり推進大崎地方本部

大崎農業改良普及センター

TEL: 0229-91-0726 FAX: 0229-23-0910

<https://www.pref.miyagi.jp/site/osnokai/>

今後の管理のポイント

- ・出穂期が早まる見込みです。遅れずに適期管理をしましょう。
- ・斑点米カメムシ類の発生は早く、発生量が多い見込みですので注意しましょう。
- ・高温対策と節水を兼ねた飽水管理を実施しましょう。

1 気象経過（前5か年間平均値との比較）

6月第4半旬以降、高温傾向が続いています。6月第4半旬以降は降雨が少なく、日照時間が多くなりました。7月第3半旬は平年並の気温と日照時間でした。

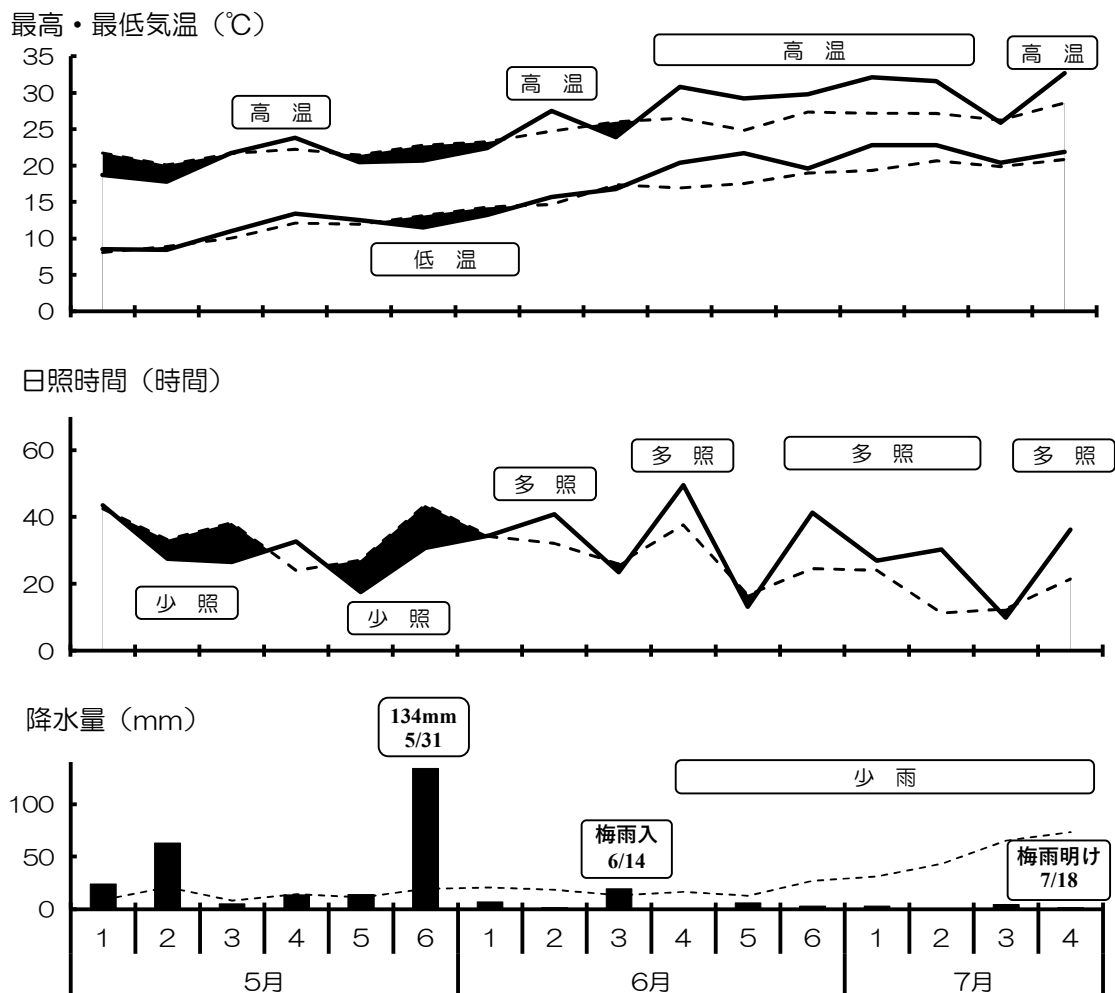


図1 5～7月の気象（古川アメダス）※前5か年平均値との比較。

2 生育概況（7月18日現在）

北部平坦（三本木・古川）では平年よりも生育量が大きく、平年より1～3日早く減数分裂期（幼穂長30～120mm）に達しています。西部丘陵（小野田）では、茎数は平年よりも少ないままですが、幼穂形成期に達しています。いずれも前回調査よりも葉色が低下しています。

乾田直播栽培でもほぼ全てのほ場で幼穂形成期に達しました。北部平坦の移植栽培と比べると、4～8日生育が遅れています。

表1 生育調査結果

栽培様式	品種名	地区名	前作	田植日 播種日	7月20日					幼穂 形成始期 (月/日)	減数分裂期 (月/日)
					茎数 本/㎡ (平年比)	草丈 cm (平年比)	葉色 GM (平年差)	生育量 茎数×草丈×葉色 (平年比)	幼穂長 mm (平年差)		
移植	ひとめぼれ	三本木	水稻	5/5 (+1)	626 (123%)	87.9 (110%)	39.1 (+2.1)	21.5 (144%)	78.0 (-30.0)	7/3 (-1)	7/14 (-1)
		小野田	水稻	5/21 (+4)	352 (72%)	74.4 (97%)	40.4 (-0.6)	10.6 (71%)	3.8 (-20.2)	7/14 (+3)	
	ササニシキ	古川	水稻	5/6 (-2)	528 (105%)	80.3 (104%)	37.8 (-0.2)	16.0 (107%)	65.8 (-5.2)	7/5 (-3)	7/15 (-3)
	平均			5/10 (+1)	502 (100%)	80.9 (104%)	39.1 (+0.4)	16.0 (107%)	49.2 (-18.5)	7/7 (-0.3)	
乾田 直播	ササニシキ	古川	大豆	4/28	716	61.8	39.9	17.7	0.8		
		三本木	大豆	4/10	796	76.4	43.3	26.3	4.6	7/9	
			水稻	4/10	532	70.0	38.0	14.2	5.4	7/13	
	ふくひびき	色麻	大豆	4/22	445	84.7	35.5	13.4	8.9	7/10	

※田植日の+は遅いこと、-は早いことを示す。乾田直播はいずれもグレーンドリル鎮圧方式による。

※平年比・差は前5か年（令和2～6年）の平均値との比較。

※生育量は茎数/㎡×草丈 cm×GM 値÷10 万で求める指標で追肥判断等の目安となります。

表2 生育ステージ予測

田植時期	田植始期	田植盛期	田植終期	7/20現在,7/21 以降はアメダス 前11年平均値で 予測
	4月30日	5月10日	5月23日	
幼穂形成始期	7月1日	7月7日	7月18日	
減数分裂期	7月8日	7月15日	7月26日	
出穂期	始期	最盛期	終期	
	7月21日	7月28日	8月7日	
平年（前5カ年） との差	7日早い	3日早い	2日遅い	

※対象品種は「ひとめぼれ」、「ササニシキ」

3 追肥 白未熟粒の発生を防ぐため、生育量を基に施肥を判断

基肥の窒素肥効が無くなり、籾数の不足や登熟不良が予測される場合は追肥によって生育調整を図りましょう。

表3 追肥の主な効果・影響（◎：効果高い、○：効果あり、×悪影響あり）

		穂数の増加	1穂穎花数の増加	1穂穎花数の減少防止	登熟の良化	下位節間の伸長と倒伏	玄米タンパク質の増加
施用時期	幼穂形成期	○	◎	○		×	
	減数分裂期		○	◎	◎		
	穂揃期				○		×

高温下では、籾数過多や登熟期の窒素栄養不足により白未熟粒の発生が助長されるので、ほ場ごとの地力に応じた適正な施肥管理に努め、必要に応じて適期に追肥を行いましょう。

※各品種の追肥量の目安、倒伏診断指標については稲作情報第4号を参照してください。

4 病害虫防除 **出穂予想に基づいて適期に実施**

表 4 宮城県病害虫防除所による発生予報（7月18日発行第6号より抜粋）

病害虫名	発生予報
いもち病（葉いもち）	発生量：平年並
いもち病（穂いもち）	発生時期：やや早い 発生量：平年並
紋枯病	発生量：平年並
稲こうじ病	発生量：平年並
斑点米カメムシ類	発生時期：やや早い 発生量：多

※7月9日～11，14日巡回調査結果より

- 葉いもち：ほ場をよく見回り、発病が見られた際は速やかに茎葉散布剤で防除しましょう。上位葉での発病は穂いもちの重要な伝染源になるので注意しましょう。
- 穂いもち：水面施用剤による予防防除を実施する場合は、出穂期の予測に基づき使用時期（出穂 20～10 日前頃）を逸しないように注意しましょう。
- 紋枯病：高温下では、紋枯病が発生・拡大しやすくなります。前年に紋枯病が多発したほ場では穂揃期に茎葉散布剤を散布するなど、防除を徹底しましょう。特に条播の乾田直播栽培は紋枯病が拡大しやすいので注意しましょう。
- 稲こうじ病：窒素過多で発生が助長されるので追肥の際は注意しましょう。
- 斑点米カメムシ類：病害虫防除所より注意報（7月18日付）が出されています。発生は早く、発生量が多い見込みです。斑点米カメムシ類の薬剤防除は穂揃期とその7～10日後の2回防除が基本です。多発の原因となるイヌホタルイやノビエが残草したほ場では、1回目の殺虫剤散布を出穂始期～穂揃期に早めましょう。クモハリカメムシの多発地域では、穂揃期とその7日後の2回防除後にさらに追加防除を実施することで斑点米被害のリスクを低減できます。



写真1 紋枯病の病斑



体長 15～17mm
体型は大型で細身
体色は緑色だが、
死後は黄褐色に変
色する。

写真2 クモハリカメムシ



体長 9～11mm
体色は黄褐色
前胸背の両角は側方
に突出し、針状にと
がる

写真3 ホソハリカメムシ

（写真はいずれも宮城県病害虫防除所 HP より引用）

※主な病害虫の防除方法、防除時期の目安については稲作情報第5号を参照してください。

5 出穂前後の水管理 **高温対策と節水を兼ねた飽水管理を**

（1）基本的な水管理

中干終了 → 間断かん水 → 浅水 → 間断かん水
（幼穂形成期） （穂ばらみ期） （出穂・開花期） （登熟期）

（2）出穂後高温時の水管理

○走水等により土壌を常に湿潤状態に保つ飽水管理

出穂後の水管理を飽水管理で維持することによって、湛水管理に比べて乳白粒や胴割粒の発生が軽減できる。

